

2018年度 前期授業評価アンケート 顕彰科目担当教員コメント

教員名	島田浩之
顕彰科目名	手話講座2
<p>●授業運営において工夫されている点</p> <p>1. 「易」から「難」への指導過程を授業の展開として忠実に守り、既習事項や既存の知識を活用して、学習内容を積み上げられるように授業を展開している。特に手話の場合は、手話単語の成り立ちが普段の何気ない身振りや、普段よく目にする物の特徴に由来するものが多く、それらをまず想像させる（＝「易」に相当）。その後、ろう者の知恵と工夫が詰まった、聴者には想像もつかない語源の手話単語を提示している（＝「難」に相当。）</p> <p>2. 初修段階では、手話を「福祉」の分野に留めることなく「言語」として考え、言葉を学ぶことの楽しさを前面に押し出している。その一環として、私が考案した学習項目を利用したゲームを毎回の授業の後半に取り入れている。（例）「手話の疑問詞」を学んだ際、「いくら」という手話表現を使って、前の週に既習の数字の手話も取り入れて、手話を使った買い物ゲームを行い主体的に手話を使う機会を設けている。このような取り組みにより90分間を座学に留めることを避け、身体を動かしながら身体に手話表現を覚えさせることが可能。（「全ての学習内容はゲームにできる」という方針で、楽しく実践的な言語使用ができるよう、授業準備に労力をかけている。授業準備での創意工夫が効果的な授業を生む。）</p> <p>3. 手話単語の語源を可能な限り伝えたり、受講生にも推測させたりしながら、本来言語が持つ表現形式と意味との間の恣意性を、可能な限り動機づけがあるもの[＝根拠があるもの]として受講生に提示し、手話単語を記憶に残りやすいように指導を展開している。</p> <p>4. 全体指導だけでなく個別指導の時間を効果的に取り入れている。個別指導の時間帯では受講生には「私」を主語にした文を毎週の学習項目に沿って考えてもらい、一人一人の文を私が手話に翻訳している。その文を最後に受講生各人に発表してもらい、他の人にも発表者の表現を共有できるようにする。</p> <p>5. ゲームにおいても、4月の段階では、①できるだけ個人を中心としてクラスで対抗するゲームを行い、その後5月に②グループ毎の対抗戦ではあるが個人に重点を置くゲーム、③6・7月にはグループのチームワークが必要なゲームを行うというように、自分が知らない受講生と徐々に関わることができるようにしている。というのは、グループ学習が苦手な受講生に配慮するためであり、それでも多様な個性を持つ他学部・他学科の人たちも受講しているこの授業で横のつながりを持てるようにしている。</p> <p>6. 「褒めて伸ばす」ことは必要以上にはしないが、毎週の学習項目の中で「私」を主語にした文を作成してもらったりしながら、その内容に授業担当者の私が「共感する」ことができるよう、毎週気持ちを新鮮にして授業に臨んでいる。授業には、教える側と教えてもらう側との間に「差」は当然生じ、授業に対する敬意や礼儀は必要である。その一方で「共感」という気持ちを持つことで、教師が受講生に対して対等な目線で接することが可能になり、受講生とのコミュニケーションがスムーズになる。</p> <p>●今後取り組んでいこうと考えておられることなど</p> <p>1. 3分ほどのスピーチを手話でできるよう、さらに個別指導に重点を置く。この場合も自分のことを語ってもらうように、「この1年間に頑張ったこと」のように自分の良い点を手話でアピールしてもらう。</p> <p>2. 手話上級者に対する授業内容も時間の後半に入れるように考えている。しかし初修者が混乱しないよう、導入のタイミングに細心の注意を払う必要がある。</p>	